

協和運輸倉庫（高橋大輔社長、仙台市宮城野区）は人材育成に力を入れている。派遣社員を活用した組織体制を見直し、正社員による企業経営に取り組み、4月には10人の高卒者を迎え入れる。

東日本大震災がターニングポイント。高橋社長（41）が社長に就任した年に発生し、大きな被害を受けた。早急な復旧・復興を目指したが、人手不足がネックになった。当時は固定費を削減するため派遣社員を活用していたが、震災で派遣社員は集まらない。

そこで、「正社員」による経営方針に転換。新卒採用を軸に高校訪問など採用活動を展開。しかし、当初は知名度も低く、取り合ってくれない。それでも毎年、粘り強く通いつめ、徐々に生徒が入社するようになった。この間、入社後の教育研修や福利厚生の実施など受け入れ態勢も整えた。苦い経験もある。新卒1人だけを配属したため、孤立して退社したケースもあり、「いかに辞めさせないか」と考えた。配属では若い世代を固めたり、出身校の先輩がいる職場を充てるなど様々な対策を講じた。今では、ベテランが率先して指導する風土ができてき



フットサル部が昨夏に復活

たという。

こうした取り組みが奏功し、2016年には4人、17年2人、18年7人が入社した。19年は10人が入社する予定（男性4人、女性6人）。女性は2人が現業を希望し、男性では初めて運転職希望で1人が入る。現在、新卒入社の子社員は34人となり、全体の約3分の1を占める。

定着率向上や社内活性化につなげるため、フットサル部が昨夏に復活した。若手社員による定例会で、機運が盛り上がり、健康増進や仲間意識の高揚として女性3人を含む部員17人で結成し、月1回ペースで活動している。19年入社予定の1人は「サッカー部の先輩がいる会社で働きたい」というのが動機だった。

高橋氏は「過去最高の10人を迎え入れる。決め手はないが、人材を大切にすることが重要。生き生きと働いてもらえる環境づくりを心掛けた」と話す。今後は新しい部の設立も応援していく。（黒田秀男）

## 配属工夫し定着率向上

協和運輸倉庫

### 今春、新卒10人入社